

ストア派とプロティノスにおけるアパテイア ——内面の自由をめぐつて——

山口 義久

よく知られているように、ストア派の理想的境地は「パトスをもたない者(*ἀπαθήτος*)」とも表現される。

彼らは、知者がパトスに陥ることがないがゆえにパトスを

もたない者だと言う。知者以外にもパトスをもたない者がいて、それは劣悪な者で、心が固くて容赦のない者と同等のものとして語られる者である（SVF III 四四八・ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』VII 一一七）。

その「用語」は『断片集』にはたまにしか出てこないが、知者が「パトス(*πάθος*)に陥ることがないがゆえに」パトスをもたない者だと言っているわけだから、パトスからの脱却という意味で理解できよう。他方プロティノスは、魂の本来のあり方は、作用を受けることがないもの(*ἀπαθήτος*)だと考えている（III 6『非物體の非受動性』）。そうであれば、ストア的な理想は、プロティノスの見方に立てば、魂の本来のあり方を回復することによって実現すると言えることになるのではないか。

このような観点から眺めるとき、ストア派とプロティノスの知者像が二重写しになつて見えてくる。しかもその境地は、どちらの立場から見ても、魂がパトスすなわちさまざまな影響から自由になつている境地だと言うことができる。たとえば、プロティノスはIII 1「宿命について」八章で、

魂は身体をもたないとき、とりわけ自らの主であり、自由であつて、宇宙の原因の外にあるが、身体のうちに入つてしまふと、あたかも他のものと一緒に秩序づけられているようにもはやあらゆる点で支配的ではなくなる。

と言っている（八章九一一二）。ストア派の場合も、やはり知者の形容の一つとして「自由」ということが言われている。

知者にはあらゆるもののが属していると言われるのも当然である——彼だけがあらゆるものを使い方を知っているのだから。また彼が美しいと呼ばれるのも当然である——精神の輪郭は身体のそれよりも美しいのだから。彼だけが自由

だと言われるのも当然である——誰の支配にも服さず、欲望にもしたがわないのだから。打ち負かされないと言われるのも当然である——たとえ身体が縛られても、精神にはいかなる鎖もかけられないのだから（S V F III 五九一・キケロ『善と惡の究極について』III 七五）。

ここでは、両者のこの一見して類似・共通した特徴の背後に、いかなる事柄の捉え方の違いがあるかを探つてみたい。そのことによつて、共通性が意味している内容がより明確になることを期待できる。全体的な考え方の枠組の違いを押さえることができれば、枠組ゆえの共通点と、枠からはずれた共通点とを区別することができるだろうからである。

1. ストア派の知者とパトス

ストア派の知者の境地、言い換えれば理想的境地は、あまり「アパティア (*ἀπάθεια*)」とか「アパテース」と表現されることがない。その言い方は、初期ストア派自身の用語であるというよりは、ストア派の考え方を外からまとめて表現するために使われているような印象さえ受ける。たとえば、次のように。

ストア派の以前にも、諸々の徳は無情動（アパティア）のうちにあるとする、この見解があつたことを知らなければならない（S V F III 二〇一・逸名著作家『アリストテレス「ニコマコス倫理学』注解』一二八、五）。

それでも、その意味はパトスの超克、あるいはそれからの脱却ということであれば、ストア派の意図には反していないはずである。それは、たとえば次の断片からも読みとれるであろう。

ストア派は、あらゆるパトスを——魂はそれの衝動によつて動搖させられるのだが——人間から除き去るのである。パトスとは、欲望、快樂、恐怖、苦痛で、……彼らはこれを、すでに述べたように、病氣と呼んでいるが、それは自然によって植えつけられているだけでなく、歪んだ思惑によって受け入れられるものもある。そのため、善悪についての間違った思惑が取り去られるなら、それを根本から絶やすことができると彼らは考えるのだ。なぜなら、知者は何ものとも善とは判断せず、何ものとも惡とは判断せずに、欲望に燃えることもなければ、快樂で有頂天になることもなく、恐怖で怯えることも、苦痛で萎縮することもないのだからである（S V F III 四四四・ラクタンティウス『信教提要』VI、一四）。

しかし、ストア派がパトスと呼ぶものは、パトスという語の一般的の用法より外延が狭い。したがつて、知者がパトスをもたないということを、一般の用法から理解するなら、ストア派が言う悪い意味のパトスだけでなく、あらゆる感情や欲求を欠いているという意味にとられる虞れがある。

フルタルコスは、知者の心のあり方として、ストア派がアパティアではなく、エウパティア (*eὐπάθεια*) を用いていることを、

言葉遣い（だけ）は適切だと評している。

彼ら「ストア派」自身も、明らかさのためにある意味では譲歩して、恥じることをはばかることと呼び、快樂を味わうこととを悦ぶことと、恐れを慎重さと呼んでいる。このような「いい意味の言葉に換える」言葉遣いは、もし同じパトスが思考に味方する場合に彼らは後者の名前で呼び、思考に敵対して強制する場合には前者の呼び方をしているのだったら、誰も非難しなかつたことだろう。だが、彼らは……哲学的ではなくソフィスト的な正当化や事実からの逃避を言葉を通じて画策していると思われる。ただし、彼ら自身あの悦びや意志や慎重さを「よい情念」と呼んで「無情念」と呼ばないでの、この点では正しい言葉遣いをしている（S V F III 四三九・『プルタルコス』倫理的徳について』九（四四九A）。

エウパティアは、言わば広い意味のパトスに包含されていて、それが脱却していると言えるのは狭い意味のパトスだけなのである。つまり、ストア派がそこからの脱却を目指すパトスはある種の感情や欲求であつて、その全体ではない。したがつて、「情念」のようなパトスに対する通常の訳語は、ストア派の概念の訳語としては相応しくないのである。キケロがラテン語の訳語をあたえる際に「攪乱」(perturbatio)と工夫して訳したのも（たとえば、キケロ『トウスクルム荘対談集』第四卷二二参照）、そういう事情があつてのことだと考えられる。

それでは、ストア派はなぜそのようなものだけをパトスと呼

んで特別扱いしたのか。その問題を、パトスの受動性という視点から考えてみよう。ストア派の立場から見ると、知者の境地に達していない、つまりパトスを脱却していない段階では、魂のはたらきは必ず受動的な側面をもつてている。それはパトスに支配されている、あるいは左右されているという意味で、内面的な自由が実現していない状態でもある。知者の心の状態は、エウパティア（よき情念）を含むわけだが、これは受動性を含意していないのだろうか。

そのような疑問をいだく人はあまりいないかもしないが、エウパティアの中に含まれているパトスの文字どおりの意味を考えれば、そういう問題も考えておいたほうがいいように思われる。ただし、これはストア派の人々が意識した問題だとは考えられない。このような問題を考えるためにには、パトスという言葉に含まれる「情念（感情・欲望）」という意味と「受動性」という意味が区別されている必要がある。しかし、ストア派が議論に用いた語彙から見て、そのような区別がなされているようには見えないのである。

しかし、ストア派のエウパティアの意義をわれわれなりに理解しようとするなら、上の疑問すなわち、知者の心の情態は、受動性を含んでいないのかという問題は、けつして無意味なものではない。それはストア派の知者と凡人の違いに新たな光を当ててくれる可能性がある。そして、もしその情態が受動性を超えていると言えるなら、ストア派がパトスの中にエウパティアを含めなかつたことは当を得ていているであろう。

エウパティアについて順番に見ていくと、まず慎重さあるい

は注意深め (*εὐλάβεια*) は、恐怖とは違つて、何か恐るべき対象からの影響で注意深くなることではないと思われる。知者が注意深くなる必要のある事柄とは何であろうか。それは暴漢に襲われるのではないかとか、金銭的な損失を受けるのではないかと。いうような類の事柄ではない。そういう事柄は、それ自体として悪ではないので、それが生じることは、知者にとつては恐れる必要のことである。

ストア派の知者が避けなければならないと考えるのは、言うまでもなく悪徳と、それに連なる事柄である。もちろん徳に反する行為もそれに含まれる。そのような行為をなすことのないよう注意を払うことは、知者にとつては行動の中に組み込まれた当たり前のことであつて、それによつて心が動搖することも考えられない。このことは、何かから影響を受動しているという要素を含んでいよいよできる。

パトスの一つである快樂が、善が現前しているという惑念と、それによつてひき起こされる魂の昂揚であるのに対し、喜びあるいは歡喜 (*χαρά*) は、知者が感じる喜びである。知者が喜ぶ対象はもちろん善であるが、それは凡人によつて善と思われるものとは区別されなければならない。すなわち、知者にとつての善は、徳とそれに連なる事柄であるから、たとえば徳にもとづいた行為をすることに喜びを覚える場合が典型的と考えられる。喜びの質としては、自らの徳に満足すると同質のものだと考えられる。だとすると、これも受動的な感情と単純に言えないことになる。少なくとも、パトスの特徴である魂の動搖を伴つていなことはたしかである。

もう一つの欲求 (*όρεξις*) もしくは意志 (*βούλησις*) についても、凡人の欲求すなわち欲望との違いを考えることによって理解することができるであろう。欲望の対象となるのは、将来の善と思われるものである。具体的には富であつたり健康であつたり、快樂であつたり名声であつたり、さまざまであつろう。大体が、善でも悪でもないもののうち、優先されるものの部類に属するものが予想される。それらのものの表象によつて、それらを得たいという心境にさせられるのは、受動情態と言える。

それに対して、知者の欲求は眞の善を欲することになるので、徳あるいは徳の系列を欲することになるが、徳はすでに実現しているので、欲求の対象は徳にもとづいた行動ということになる。これは内発的な意志の行使でこそあれ、けつして影響受動とは考えられない。このように見ると、ストア派が彼らの用語法におけるパトスを欲求・感情の中で特別扱いしていることは、正当化できることではないと思われる。すなわち、ストア派の知者は、感情をもたないという意味ではなく、「非受動的」という意味で「アパテース」と呼んでもいいのではないかと考えられる。

ストア派の知者は、べつの側面から見ると、首尾一貫して口ごそに従つている者もある。その間の事情には、徳は知であるという表現もあたえられる。この、徳が知であるといわれるものの内容は、善惡に関わる知である。しかし、善惡の判断の正しさは、

言うまでもなく情報量の多さによつては保証されない。むしろ、さまざまな情報に対しても一つの見方（価値観）を確保できているかどうかに、その知は左右されるのである。

また、つねにロゴスしたがうことは、パトスをもたないことを意味する。ロゴスとパトスを、理性と情念というような図式に当てはめて、魂の中の対立する要素として考えるなら、つねにロゴスしたがうことは、ロゴスがパトスを完全に制圧する、あるいは服従させることだと見ることになるであろう。その場合には「パトスをもたない」などという言い方は不合理にしか聞こえない。しかし、ストア派の魂のとらえ方からすると、それとはまったく違つた見方ができるのである。

ストア派も魂の部分を区分しているが、中枢的な役割をはたす主導的部分のはたらきのなかに、ロゴスもパトスも含まれてゐる。つまりこの両者は、魂の主導的部分の違つたあり方であつて、別々の要素ではない。主導的部分がロゴスとして活動しているときは、パトスとしてははたらいておらず、パトスとしてはたらいているとき、すなわち、苦痛を感じたり、欲望をいだいたりするときは、ロゴスとして活動していない。したがつて、知者がつねにロゴスとして活動し、パトスとしては活動しないことが保証されているなら、パトスをもつていないと言えることになる。

この見方は、ほかに類を見ないものであるので、他の立場からの批判にさらされた。とくにガレノスによる批判がかなりの分量残されている（S V F II 九一一）。この点におけるストアとプラトン主義の違いはけつして軽視できないものである。

二・プロティノスにおける魂の非受動性

プロティノスは、III 6において「非物体」の非受動性を論じてゐる。その前半は魂について、後半は質料について論じられる。今考察のためには、魂の非受動性に目を向けるだけでいいのだが、そうであればなおさら、なんで「非物体」の非受動性と言われているのかが疑問になる。III 6 論文の内容からは、魂と質料の両方について論じるために両者に共通する「非物体」という形容を用いているのだろうと、漠然と想像されるのだが、落ち着いて考えてみるとべつの見方が浮かび上がつてくる。

ストア派は、存在するものがすべて物体であるという見方をとり、したがつて、魂もまた物体であると考える。そのことを論じる議論の一つは、魂が物体でなかつたら、物体である身体から作用を受けたり、身体に作用を及ぼしたりすることはできないだろうというものである。プロティノスが「非物体の非受動性」と言うのは、このようなストア派の議論に対する応答の意味ももつてゐる可能性がある。

非物体と言えば、魂だけでなく、もつと上位の原理である知性・イデアや一者も当然含まれるはずだが、プロティノスは魂のレベルに議論を集中している。それは、上位の原理については言つまでもないといふことだとも言えるが、受動性が問題になるのは、とりわけ魂のレベルだということでもある。常識的には、あるいは通常の言葉遣いでは、パトス（影響受動）の主体は魂にほかない。それが魂でないとしたら、どこにパトスが存在するのか。

いきなり III 6 の冒頭で、プロティノスは、受動的な捉え方がなされることが多い感覺について、それは影響受動ではなく、影響受動の内容（*μάθησις*）についての（言わば能動的な）活動である判断であるという見方を示している。ここにすでに、プロティノスがこの事柄を捉える際の基本線が現われている。つまり、感覺の場合も、感覺対象からの作用を受けることと見なすのではなく、感覺器官は作用を受けても、魂の活動はそれを言わば読みとるという（能動的な）はたらきだということである。

そのあとの議論のなかでは、魂は形相として身体・物体と対比されることによって、影響をこうむらないことが述べられている。

いかなる形相にも動搖があるいは一般に影響受動が属してはならず、それ自体静止しているべきであつて、影響をこうむる場合に、影響を受けなければならないのは形相の質料のほうであつて、そのことは、形相が現前しつつ動かすことによつて引き起こされるのだ（III 6、四章三五）

そして魂の生育的部分を例に挙げて、それが生きものを成長させるときに自らも成長するわけではないと述べられている。この部分は、魂としては下位の部分であるが、それでも動かす側に位置づけられ、能動性に特徴があるということが、魂の一般的特性を示す例として用いられたのであろう。このように、彼にとって魂は本質的に能動的なものであり、受動性を脱却しているのだが、しかし凡人は、本来の魂のあり方を

基盤とした生き方をしていないように見える。その際の受動性をプロティノスはどのように位置づけているのか。影響を受ける主体は、本来の魂ではないのだとすると、何が影響をこうむっているのか。

I 1『生きものとは何か、人間とは何か』では明瞭に、影響を受けるのは合一体としての生きものであるということが述べられている。

いや、合一体が感覺するのだと考えることにしよう。そのさうい魂は、合一体にそなわることによつて、そのような特性をもつたものとして自らを合一体やもう一方「身体」にあたえるのではなく、これこれ様の身体と、魂自身からあたえられた何か光のようなものとから、生きものの本性をそれらとは別のものとして作り出すのであるが、このものに、感覺することや、その他の生きものの情態として語られたかぎりのものが属するのである（プロティノス I 1、七章一）。

ここに見られるように、その合一体は、魂そのものと身体が結びついたものではなく、魂から出た「光のようなもの」（八章一七では「魂の影像」と身体が一緒になつたものである。さきに例に挙げられているのを見た生育的部分は、おそらくこの合一体のなかの魂であるので、合一体の中でも魂の本質は能動性にあるが、合一体としては影響受動を受けるということになるだろう。

そうすると、魂が非受動的だということが純粹に言えるのは、

合一体とは区別された魂そのものであることになる。合一体が受ける影響には、物理的・身体的な側面と、心的な側面があるが、それを魂の言わば本体は認識し、判断を下すのである。III 6の冒頭で語られた感覚の捉え方も、この見方に合致している。

問題は、そうすると、非受動的なはずの魂の本体が影響を受動しているようにしか見えない場合が少くないのは何故かといふことになる。差し当たつて、III 6の表現でプロティノスの答を見ると、それは「ちょうど、ひとが夢の現れを消してしまおうとする時に、その現れを作り出している魂を目覚めさせようとする場合のように」（五章一〇）と言われている。つまり、魂の本体が影響を受けて、現れる夢を見て、目覚めさせようとする。夢から覚めれば本来の魂のあり方が回復されるということである。

夢を見ている状態にたどえられているのは、この世界の出来事に目を奪われ、知性とのつながりを見失つてしまっている状態である。だからこそ、「下方から、もう一つの方向の上方へ向かうならば、それが魂の側の浄めであり分離にほかならない」（五章一九）と言われるのである。それは、魂本来のあり方の回復であるのだから。

三・両者の枠組の違い

プロティノスはプラトン的な（あるいはアリストテレス的な）魂の区分を認めていて、ストア派は、上に見たように、魂の主導的部分の单一性を強調する。この点については、プルタルコスがプラトンの立場に立つてストア派を批判しているので、大き

な違いではないかと考えられるが、枠組として考えればどういふ問題と関係するのであろうか。

魂の非受動性と人間のパトスとの関係で問題になるのは、プロティノスの場合、三区分説的な区別そのものではなく、むしろ本来の魂と、統合体（合一体）における魂との区別である。本来の魂が、統合体における（影とも言われる）魂の方向に向いているかぎりにおいては、そこにパトスが認識される。ただし、その場合に本来の魂と統合体における魂との間で（理性と情念のような）葛藤があるとは限らない。知性の方向（上方／内側）に向かうことを忘れて、外界への顧慮に沈潜しているだけかもしれないからである。

ストア派の見方がユニークであることは、繰り返して言うまでもないほど目立っている。プロティノスが魂の非受動性といふことを論じた背景には、ストア派のパトス観があつたかもしれないが、魂が本来受動とは無縁だという考えは、ストア派とも共有していないのみならず、あまり類を見ないものだと言える。

魂が最初から影響受動をこうむることもないのなら、どうして哲学によつて、魂をパトスのないものとしようとする求めなければならないのだろうか（III 6、五章一）。

この引用には、ストア派に対する意識を読みとることができるものかもしれない。パトスからの脱却というような言葉遣いを抜きにすれば、それは、ソクラテス的・プラトン的な生き方とも重なるものであろうが、この点についてはあらためて考察したい。

さて、自由の問題を副題に掲げたが、ここまで表向きにはあまり論じてこなかつた。しかし、パトスを免れているということは

つねに、パトスから自由であると言い換える事態である。この自由はもちろん、社会的な自由とはかなり異質なものである。あるいは、決定論や宿命論と対立する自由とも重ならない。後者は意志の自由と呼ぶことができると思われるが、パトスからの自由すなわち意志の自由とはならないからである。この点も、もつと先まで考える余地がある。

プロティノスとストア派の違いを考えしていくと、魂が向かうべき方向としての知性（さらにはその先の一者）の存在が最大の分かれ目のように見えてくる。ストア派の場合、パトスから自由になることは、同時にロゴスにしたがつていることになるわけだが、ロゴスにしたがうことがいかにして可能になるのか。人間の魂が本来ロゴス的だというだけでは、説明にならないのではないかと思われる。本来ロゴス的であるなら、パトスにしたがうのは不合理のように見えるが、パトスにしたがうことが現実であるなら、本来ロゴス的であつただけではロゴスにしたがう理由にならないのである。

それに対してプロティノスの場合には、魂が本来のあり方を發揮するのは、その根源である知性とのつながりを維持あるいは回復しているときである。そこには実在の構造の中での、魂の位置づけがある。すなわち、知性原理が魂の上位にあって、魂のロゴスはそこに由来するし、魂の非受動性もその知性とのつながりの中で確保されている。ストア派の見方は、プロティノスの体系のもつてているようなダイナミズムを欠いているという印象

は否めない。

ストア派とプロティノスの最大の違いは、このような実在の秩序の捉え方の違いであると思われる。プロティノスの議論のなかにストア派的な要素が出てくるのを見ていると、ストア哲学には、その物体主義を取り去れば、プロティノスにとつて受け入れられる内容が少なからず含まれているという印象を受ける。しかしそれは、たんにストア派の物体主義、すなわち、存在するものはすべて物体だという見方との違いだけによるわけではない。もつと大きな枠組において、プロティノスとストア派の間には距離があるのである。